

回 覧	部(支所)長	課 長	担 当

果樹カメムシ多発！！要注意

近年稀に見る大型の台風 9 号・10 号が立て続けに長崎襲来し、大きな爪痕を残しております。本年は病害虫被害だけでなく、気象災害も多い厳しい年となりました。通過後は一気に秋らしい気候を感じられております。携帯着信音をヒグラシの鳴き声にしてみました。さて、今回は果樹全般で早い時期から発生が多くなっている果樹カメムシについてです。九州地域では「フウ」等の名称でも呼ばれますが、特徴的な臭いはカメムシの防衛反応として放出しますが、自らにもダメージを与える諸刃の剣。パクチーの青臭い臭いの中にも類似の成分が含まれているそうです。

1. 果樹カメムシの発生状況

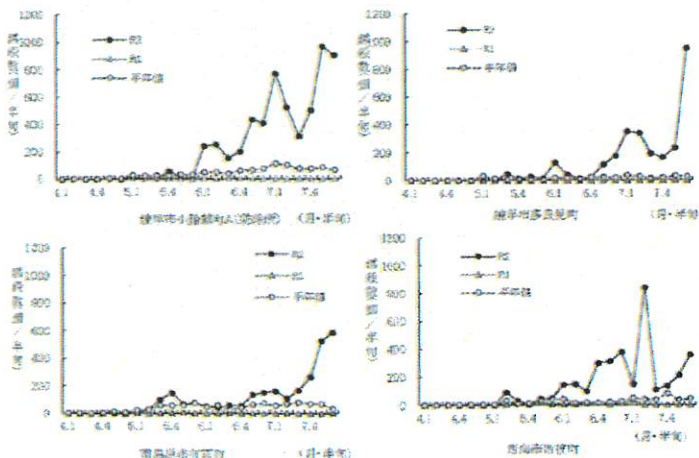


図1 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況（黄色コガネコール）

本年の越冬量は、1.56 頭/m²（平年 0.28 頭/m²）と平年より多い。

右図の現地及び県予察圃場設置フェロンモントラップにおける誘殺数についても、平年より多く県予察圃場ではかなりの誘殺数が確認されている。また、既に一部のかんきつ、なし、ぶどう園で飛来や吸汁害が確認されている。（長崎県病害虫防除所 令和2年度病害虫発生予察 注意報第6号より抜粋）

令和2年 果樹カメムシ発生の注意報発表状況



図2 全国果樹カメムシ発生注意報発表状況（令和2年5月～8月時点）

昨年、全国の都道府県で発表された果樹カメムシ発生の「注意報」は 12 都道府県で延べ 14 回発表されておりましたが、本年は 5 月の発表から現在まで 1 府 27 県において延べ 32 回の発表となっており、全国各地域で果樹カメムシの発生が多くなっており、またその被害が懸念されている。（病害虫発生速報（WEB上で都道府県より発表）アピネスアグリインフォより）

私たちJAグループは“無登録農薬”は扱いません！

2. 果樹カメムシについて

(1) 生態について

種々のカメムシがカンキツを加害するが、主要な種はチャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシである。本州のカンキツ産地ではこの3種が生息するが、チャバネアオカメムシが主体で、西南暖地ではツヤアオカメムシが主体である。

各種とも山林のスギ・ヒノキなどの毬果^{きゅうが}に寄生しており、ここで産卵、繁殖する。幼虫は5齢を経て成虫になるが、カンキツ園内ではクサギカメムシを除き、幼虫はほとんど生育できない。チャバネアオカメムシは落ち葉下、ツヤアオカメムシは常緑樹の樹冠内、クサギカメムシは家屋内などで成虫越冬し、本年のように越冬量が多い場合は7～8月に果実が加害される。

餌となるスギ・ヒノキの着果量が多い年は夏季～秋季に山林での繁殖量が多くなる。種によって異なるが、卵から成虫まで約1ヶ月で、年2～3世代を繰り返す。

カメムシによってスギ・ヒノキの毬果^{きゅうが}の吸汁が進むと、山林で育った新成虫はその場を離脱し、餌を求めてカンキツ園に飛来する。新成虫の発生が多い年は9月以降に被害が増加する。通常は10月末で終息するが、最高気温が20℃を上回れば11月でも加害することがある(図3)。

表1 主な果樹カメムシの特徴

害虫名	チャバネアオカメムシ	ツヤアオカメムシ	クサギカメムシ
分類	カメムシ(半翅)目カメムシ科		
写真	 (写真：全農提供)	 (写真：北興化学提供)	 (写真：全農提供)
特徴	全国的に分布するが、暖地で被害が大きい。	西南暖地で特にカンキツ地帯で多い	食性の範囲がきわめて広く、冷涼地で被害大
形態	成虫は体長11mm内外、緑色の体で、翅は茶褐色。	成虫は体長15mm、鮮緑色で油状の光沢あり	成虫は体長16mm内外、暗褐色の地に黄褐色の斑紋
生態と被害	年発生回数は2～3回といわれるが、詳細は不明。越冬は林床落葉の下など。重要な発生源はスギとヒノキであり、これらの植物での球果の結実量の多少が、カメムシの発生量および果樹被害の多少に大きく関与。球果の結実が少ない年に果樹の被害が多くなる傾向がある。	越冬場所はスギ、ヒノキの樹冠内で、チャバネアオカメムシよりもスギ、ヒノキの依存度は高い。早生温州では9月上旬、普通温州では9月下旬から飛来し、果実を吸汁加害する。早朝に加害された果実は口部分が褐色に変化し、着色が早まる。	年1回発生で、成虫で家屋内や大木の樹皮間隙で越冬する。春から夏にかけてはサクラ、実をつけたクワ、キリ、ウメ、モモ等で生活し、夏から秋にかけては針葉樹(スギ、ヒノキなど)に多い。成虫は移動力が高くナシ園には果実がつき始めると飛来し吸汁加害する。

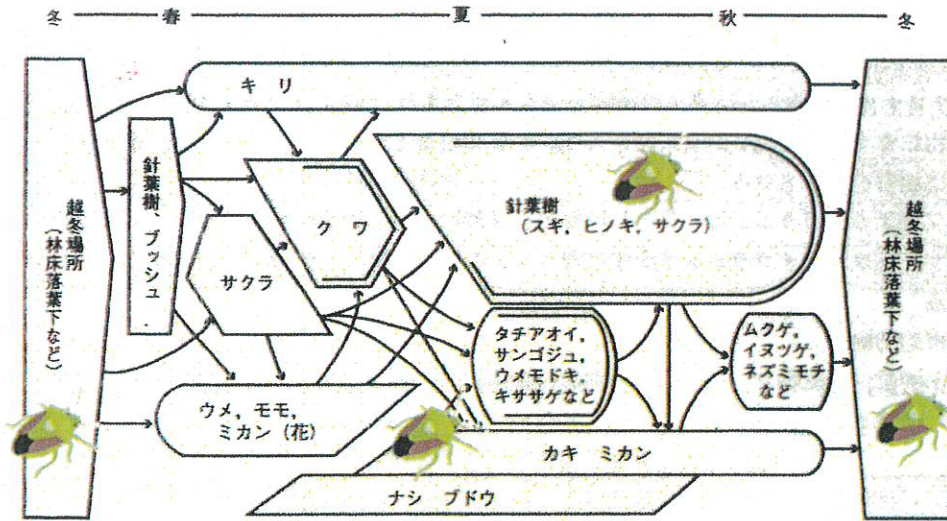


図3 チャパネアオカメムシの生息場所の季節的な変遷 (志賀)
 (注)二重線は幼虫の出現と増殖を示す。

(2) 被害について

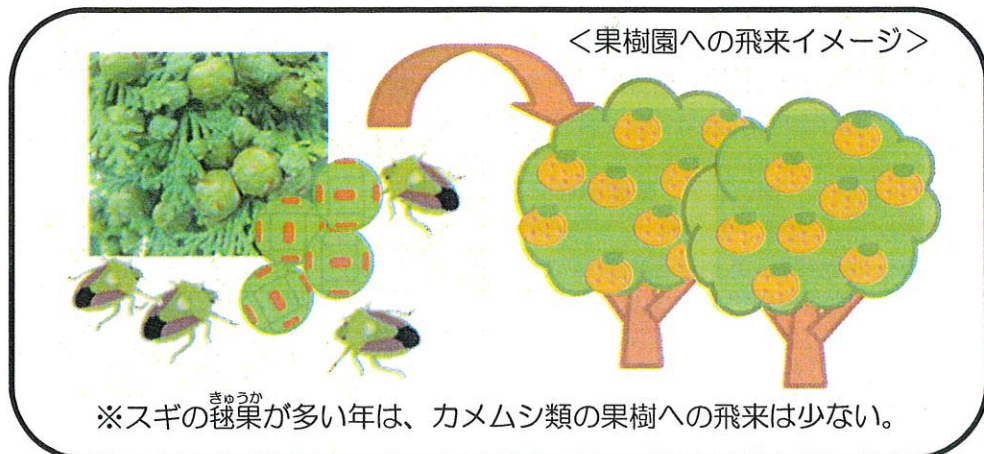
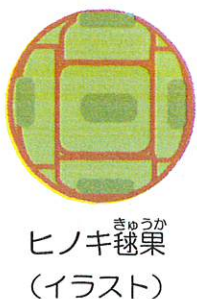
成虫が幼果から着色期の果実を吸汁することにより、被害が発生します。口針を果肉まで差し込むため、被害部位は果肉と果皮が癒着し剥皮しにくくなり、果肉は吸汁されると水分がなくなって硬化し、食味が悪くなってしまいます。また、着色期前に吸汁されると加害部周辺の果皮は異常着色し、落果しやすくなる。

主な被害：被害部凹陷 (変形果)、早期落果、被害部変色 (黒～褐色)、果肉のスポンジ状変質、被害部の着色不良など

2. 防除時期について

前述のとおり、カメムシ類はヒノキ毬果^{きゅうが}が餌として不適となるとヒノキ樹から離脱し、果樹園に飛来するため、カメムシ類の防除時期を把握する方法としてヒノキ毬果の「口針鞘」を調査することにより、カメムシ類がヒノキ樹を離脱して果樹園に飛来する時期を予測する事ができます。具体的には、ヒノキ毬果の口針鞘数が1果当たり25本を超えると餌として不適となりカメムシが離脱する傾向があります。

病害虫防除所が8月11日に発表した技術情報では、離脱予測日は県下平均で「9月4日」頃となっています。また、8月下旬における県下各地のヒノキ樹上の果樹カメムシ類寄生状況は「2.3頭/枝」(平年2.0頭)で、毬果の口針鞘数は平均「12.9本/果」(平年「11.6」)です(9月1日付け病害虫防除所)。寄生虫数・口針鞘数ともに平年並の状況ですが、地域により差がありますので、圃場をよく観察し飛来を確認した場合は薬剤による防除を実施しましょう。



3. 防除薬剤について

カメムシ類の発生量は年次変動が大きいので、防除所の飛来時期予想を参考にカンキツ園に成虫の飛来がみられる場合は登録薬剤の散布を行う。カメムシ類の活動は日没前後から活発になるため、薬剤散布は夕方あるいは早朝に行うのが効果的である。夏期は夜間に行動するので、飛来の有無を知る為に夜観察すると確認しやすい。また、合成ピレスロイド系薬剤（3A）を連用すると、天敵となる益虫へも影響がある為、ミカンハダニが急増することがあるので注意する。

表2 カメムシ類防除薬剤

薬剤名	IRAC コード	使用濃度	使用時期	使用回数
MR.ジョーカー水和剤	3A	2000 倍	収穫 14 日前まで	2 回
ロディー乳剤	3A	2000 倍	収穫 7 日前まで	4 回
テルスター水和剤	3A	1000~2000 倍	収穫前日まで	3 回
アクタラ顆粒水和剤	4A	2000 倍	収穫 14 日まで	3 回
スタークル顆粒水溶剤	4A	2000 倍	収穫前日まで	3 回

引用：発生予察情報注意報第6号、技術情報第4号、果樹カメムシピーティング調査・口針鞘数調査結果（長崎県病虫害防除所）、防除ハンドブックかんきつの病虫害（BASF）、害虫と防除（全農肥料農薬部）、写真（北興化学工業株式会社、全農耕種総合対策部提供）、日本農業害虫大辞典（全国農村教育協会）

*10月号に記載されている内容はJA全農ながさきのホームページに掲載されています。

JA全農ながさきホームページ URL：<http://www.ns.zennoh.or.jp>

JAグループ「安全防除運動」展開中

- ◎**農産物の安全**……今、消費者がもっとも願っている「食の安全」。
それは私たち生産者の願いでもあります。きちんとした農薬を選び、正しく使って、日誌に記録を残す。これを続けることが、消費者に信頼される農産物づくりにつながります。
 - ・使うのは、もちろん登録農薬！
 - ・安全使用・事故防止へ、ラベル確認を習慣に！
 - ・使用後も、防除日誌で“安全証明”
- ◎**環境の安全**……土や水といった自然の恵みを利用して営まれている農業。皆さんが守り続けてきた大切な田畑を、次の世代に残すためにも、自然環境に十分配慮した農薬散布を心がけましょう。
 - ・必要量だけ希釈し、使い切る。空容器は適正処理を！
 - ・水稻除草剤の散布後は、圃場外への流出防止策を！
- ◎**農家の安全**……軽装備による散布中の事故や子供の誤飲事故が増えています。いくら周辺環境に配慮しても自身の健康を害しては何にもなりませんし、周辺住民との信頼関係を築くためにも農薬の保管管理にはいっそう注意したいものです。
 - ・暑さに負けるな。完全防備！
 - ・使用後は“薬の戸締り”万全に！

散布するときは、
マスク、メガネ、手袋を
きちんと、つけましょう。



安全使用基準を守りましょう